



✦✦✦✦✦✦✦ 2号連続大特集 ✦✦✦✦✦✦✦

三冠馬 クロニクル

Fillies' Triple Crown Chronicle

牝馬編

「三冠」——それは誉れ高き称号。

日本の三冠競走をすべて制した馬は長い歴史で8頭、

牝馬三冠競走では6頭しかいない。

創刊80周年を記念して、競馬史に燦然と輝く優駿たちを紹介する。

三冠競走の歴史

三冠競走のうち最も歴史が古いのが、東京優駿大競走（現在の東京優駿（日本ダービー））。イギリスのダービーに範をとり、競走体系の確立と競走馬の資質向上を図る目的から、1932年に3歳牡馬・牝馬限定の重賞競走として創設された。その後、セントレジャーを範とした京都農林省賞典四歳呼馬（1938年、現菊花賞）、英2000ギニーを範とした横浜農林省賞典四歳呼馬（1939年、現皐月賞）とクラシック3競走の体系が整備され、これらの競走を「三冠」と総称するようになった。そのすべてを制した優駿が「三冠馬」と呼ばれる。

また3歳牝馬限定競走として、イギリスのオークスを範とした阪神優駿牝馬（1938年、現在の優駿牝馬（オークス））、英1000ギニーに相当する中山四歳牝馬特別（1939年、現桜花賞）が創設された。戦後、オークスの開催時期が春に移行されて以降、しばらくは秋の世代競走はなかったが、ビクトリアカップ（1970年創設、1976年にエリザベス女王杯に改称）の創設をもって3歳牝馬による牝馬三冠競走が整備された。エリザベス女王杯の古馬開放により、現在は1996年に創設された秋華賞が牝馬三冠競走の最終戦となっている。 ※馬齢表記は現在のもの。

Mejiro Ramonu
メジロラモーン

Still in Love
スティルインラブ

Apapane
アパパネ

Gentildonna
ジェンティルドナ

Almond Eye
アーモンドアイ

Daring Fact
デアリングタクト



1986
Filly's Triple Crown Chronicle
牝馬初にして唯一の完全制覇

メジロラモーン Mejiro Ramonu

一心同体で挑んだ初の偉業

35年前、牝馬三冠のラストレースが2400m戦のエリザベス女王杯だった時代。メジロラモーンが史上初の牝馬三冠を達成した。トライアルレースもすべて勝利するという「完全制覇」。管理した奥平真治元調教師と、すべての遠征に付き添った小島浩三元厩務員が当時を振り返る。

島田明宏 = 文
text by Akihiro Shimada

ダート変更となった新馬戦で 3秒1の大差をつける圧勝

奥平真治が北海道虻田郡洞爺村(現・洞爺湖町)のメジロ牧場でメジロラモーンを初めて見たのは、同馬の1歳時、1984年夏のことだった。奥平は厩舎開業14年目。73年の有馬記念をはじめ、いくつもの重賞を制していた。

「メジロの馬を預かるのは、ラモーンが初めてだったんです。それほど目立つ馬ではなかったですね」

翌85年7月、ラモーンは函館競馬場の奥平厩舎に入厩した。担当厩務員に小島浩三が指名された。

「ずいぶん腹袋のある馬だな、と思いました。それだけ胸囲があつて、心肺機能の強さにつながるわけですから、悪いことはありません」

競馬場のパドックでは入れ込むことが多かったのだが、普段はおとなしく、物音などにも動じず、扱いやすい馬だったという。

奥平がラモーンの素質を感じたのは、函館での調教だった。

「体質的に弱いところがあつて、牧場ではあまり調教をやつていなかったんです。メジロとしては、ほかにいい馬がたくさんいたし、あまり期待していません。なかつたんじゃないですか。ところが、馬場に入れてちょっと速いところをやると、すごくいい動きをしたんです」

JRA



桜花賞トライアル
報知杯4歳牝馬特別

初の関西遠征で河内洋騎手が初めて騎乗。直線入口では後方に位置していたが、猛然と伸びて逃げるチュウオウサリー(左)を捉えた

小島も同じように感じていた。

「2週間くらい15-15をやっているうちに馬が見る見るよくなって、これは面白いかな、と思いました」

デビューは同年10月13日、東京ダート1400mで行われた旧3歳新馬戦。芝からダートに変更されたこのレースで、小島太を背に、2着に3秒1の大差をつけて圧勝した。

「走るのわかっていただけ、これほど強いとは、驚きました。」

そう話す小島と小島太は従兄弟同士である。小島はつづける。

「ただ、元々出ていたソエが、余計にひどくなってしまったんです。2戦目の京成杯3歳S(4着)のときはすごく痛がっていました。それが治っていた寒菊賞(1着)と、3歳牝馬S(1着)は、自信がありました」

寒菊賞から柏崎正次に乗り替わり、86年の年明け初戦のクイーンC(4着)まで騎乗した。次走、桜花賞トライアルの4歳牝馬特別からは河内洋が乗るようになった。奥平はこう説明する。

「オーナーサイドの要望で、桜花賞に向けたレースからは関西の騎手にしよう、ということになっていました。浅見国一さんが、ほかの馬を頼まれても乗るなよと河内騎手を押さえておいてくれたんです(笑)」

トライアル前に栗東へ移動 桜花賞後は東京競馬場へ

3月16日のトライアルと4月6日の桜花賞に向けて、ラモーンと小島は2月25日に栗東トレセンに移動した。

「出張となると行きっぱなしの時代でしたからね。カイバをバリバリ食べるほうではなかったもので、朝と午後のほか、夜8時にも、1日3回与えています。だから、外で一杯飲んでからタクシーで戻ってカイバをつけて、また出かけたこともありました(笑)」

普段の調教は、かつて小島が所属した高木良三厩舎で同僚だった、二分久

男厩舎の調教助手、山下高弘が乗り、追い切りには河内が騎乗した。

4歳牝馬特別では、直線入口で後方まで下がる局面がありながら、直線で鋭く追い込み快勝。心配された馬ごみも、稍重馬場も、軽くこなした。

断然の強さから、第46回桜花賞でも単枠指定を受けた。フルゲート22頭という多頭数の5枠13番。改修前の阪神芝1600mは、スタート直後にキツいコーナーのある難コースとして知られていた。河内のエスコートで道中は中団に待機したラモーンは、3コーナーからマクするように進出。直線で豪快に末脚を伸ばし、2着に1馬身差をつけて勝った。

「トライアルも本番も、河内騎手が上手に乗ってくれました。特に、ポンと出たうえで折り合いをつけた桜花賞は、見事でしたね」

そう話した小島とラモーンは、栗東から帰厩すると、今度は東京競馬場の出張厩舎に移動した。ラモーンは、オークスの前に、トライアルの4歳牝馬特別に出走することになった。

「本番前に同じコースを経験しておいたほうがいいですし、総合的に判断して使うことにしました」と奥平。

距離が延びる本番に向け、折り合い重視の競馬をしたラモーンは、初対決となった2着のダイナアクトレスに1馬身半差をつけて勝った。



オークストライアル
サンスポ賞4歳牝馬特別

道中は中団やや後方を進み、最後の直線では馬群を割って末脚を発揮。早めに先頭に立ったダイナクトレスを一気に交わして1馬身半の差をつけた

牝馬クラシック二冠制覇はもちろん、このころから早くも、史上初の牝馬三冠制覇の期待がかけられていた。オークスでは、スタート直後につまづくも、リズムを崩すことなく、道中は中団より少し前で待機。ラスト800m付近で馬群に隙間ができると上がって行き、直線で馬場の外目を力強く

10月の初め、ラモーヌと小島は牝馬三冠制覇に向け、栗東に移動した。春も滞在した出張厩舎はまだ新しく、一頭ずつ仕切られた馬房の上に人が寝起きする部屋があった。「馬の気配や息づかいが伝わってきた。前ガキしたこともわかるくらい位置関係です。ラモーヌは、環境の

半信半疑だったトライアルは
着差は僅かでも完璧な内容

「終わってみれば桁が違うという感じです。本当に強い馬ですね」レース後、河内はそう言ってラモーヌを讃えた。5月29日、ラモーヌはメジロ牧場に放牧に出された。そして8月6日、函館競馬場の奥平厩舎に移動する。しかし、夏負けがひどかったため、函館に来てから1週間ほどで美浦トレセンに戻し、厩舎で全身に笹針治療を施すことになった。小島はこう話す。「針を打ってから5日ほど休ませて、2日ほど人が乗って運動し、10日ほど経ってから馬場入りさせました。ガタついて、緩んでいたのがずいぶんよくなりました。春の疲れも溜まっていたのでしょね。夏をいかに過ごすかが、走る馬ほど大切になってくるということ学びました」

伸び、2着のユウミロクを2馬身半突き放して圧勝した。「終わってみれば桁が違うという感じです。本当に強い馬ですね」レース後、河内はそう言ってラモーヌを讃えた。



桜花賞 1番人気

楽な手応えで4コーナーで3番手に上昇。残り400mを過ぎたあたりから末脚を伸ばして逃げ馬を交わし、後続の追い上げも振り切った

一冠目に続いて単枠指定の1番人気。トライアルとオークスの両方を勝った馬はいない。そんなジंकスも、気にしていなかった。



河内洋騎手は桜花賞の勝因を、いい枠順(5枠13番)を引いたことと、馬場が思った以上に早く乾いたことと話した

オークス 1番人気

スタートでつまづくも、河内洋騎手は冷静に距離のロスを考えて内めを進む。直線、坂を駆け上がってからスタートをかけ2馬身半差の快勝



エリザベス女王杯を勝利した直後の厩舎地区にて。奥平真治調教師(左)は2007年に、小島浩三厩務員(右)は2018年に引退している

H.Imai / JRA



引退式では優勝レイがずらりと並べられた

メジロラモーヌ

1983年4月9日生 牝 青鹿毛
 父モガミ 通算成績/12戦9勝
 母メジロヒリュウ(父ネヴァービート) 主な勝ち鞍/86エリザベス女王杯(G I)
 馬主/南メジロ牧場 86オークス(G I)
 調教師/奥平真治(美浦) 86桜花賞(G I)
 生産牧場/メジロ牧場 86ローズS(G II)
 86サンスポ賞4歳牝馬特別(G II)
 86報知杯4歳牝馬特別(G II)
 85テレビ東京賞3歳牝馬S(G III)

メジロラモーヌ 三冠までの成績

年月日	レース名	競馬場	距離(公)	馬場	騎手	着順	人気	タイム
1985.10.13	新馬	東京	ダ1400	良	小島 太	1	1	1:26.1
11. 3	京成杯3歳S(G II)	東京	芝1400	良	小島 太	4	1	1:23.9
11.30	寒菊賞(400万下)	中山	芝1600	良	柏崎正次	1	1	1:35.7
12.14	テレビ東京賞3歳牝馬S(G III)	中山	芝1600	良	柏崎正次	1	2	1:34.9
1986. 1.26	クイーンC(G III)	東京	芝1600	良	柏崎正次	4	1	1:36.5
3.16	報知杯4歳牝馬特別(G II)	阪神	芝1400	稍重	河内 洋	1	1	1:23.9
4. 6	桜花賞(G I)	阪神	芝1600	良	河内 洋	1	1	1:35.8
4.27	サンスポ賞4歳牝馬特別(G II)	東京	芝1800	良	河内 洋	1	1	1:50.8
5.18	オークス(G I)	東京	芝2400	良	河内 洋	1	1	2:29.6
10.12	ローズS(G II)	京都	芝2000	良	河内 洋	1	1	2:01.3
11. 2	エリザベス女王杯(G I)	京都	芝2400	良	河内 洋	1	1	2:29.1

引退後、故郷のメジロ牧場で繁殖牝馬となった。仔や孫からは目立った活躍馬は現れなかったが、曾孫のフィドルルージュが2008年の川崎記念グロリーヴェイズが19年の香港ヴァーズを勝つなど、自身が05年9月に老衰のため世を去ってからも、強い血の力をつないでいる。(文中敬称略)

「誰もやったことのない偉業を達成したラモーヌには、いろいろなものを見せてもらいました」
 オーナーサイドの意向で、この年の有馬記念を最後に現役を退くことになった。奥平は言う。
 「なかなかあれだけの馬には出会えませんが、私としては、古馬になってからも走らせたかったです」
 有馬記念は直線の不利がこたえて9着。「牝馬三冠制覇でツキを使い果たしてしまっただけでしょうか」と小島は苦笑する。
 引退後、故郷のメジロ牧場で繁殖牝馬となった。仔や孫からは目立った活躍馬は現れなかったが、曾孫のフィドルルージュが2008年の川崎記念グロリーヴェイズが19年の香港ヴァーズを勝つなど、自身が05年9月に老衰のため世を去ってからも、強い血の力をつないでいる。(文中敬称略)

H.Imai / JRA

JRA



エリザベス女王杯トライアルローズS
 4コーナーを回ったところでポットテスコレディ(内)と抜け出し、ラスト200mは一騎打ち。最後はクビ差で振り切り女王の貴録を見せた

変化に動じない馬でしたね。栗東の水が合うのか、馬が日に日によくなってきました。それでも、疲れが残っていないか心配でしたから、トライアルは半信半疑でした」
 10月12日のローズSは、ゴール前でようやく2着馬を競り落とす、クビ差の辛勝だった。
 「折り合いだけつけておいて、それで負けたら仕方がないという競馬でしたが、着差は僅かでも、完璧でした」
 そう振り返る小島は、それまで感じたことのない重圧に襲われていた。

次第に強くなっていったプレッシャー。三冠制覇後に初めて涙を流した。



エリザベス女王杯 1番人気

道中は5、6番手を進み、3コーナーの坂下で3番手。4コーナーでは早々と先頭に立ち、その勢いそのまま後続の追い上げを封じて牝馬三冠を達成した

H.Imai / JRA

「オークスまではまったくプレッシャーはなかったのですが、女王杯のトライアルを使ってから状態がよくなっていただけに、次も獲らなくては、という思いが強くなったんです。もし負けたら、春の二冠を獲った意味もなくなってしまうのではないかと」と
 そして牝馬三冠を締めくくる、11月2日の第11回エリザベス女王杯。ラモーヌは、スローな流れのなか、包まれるのを嫌って好位につけ、4コーナーで早くも先頭に立った。直線入口、クイーンCで負かされたスパーショットの外に併せ、内に閉じ込めるようにしてからスパート。立て直して外に持ち出したスパーショットが猛然と追い込んできたが、半馬身差での

H.Imai / JRA



トライアルと三冠全レースでコンビを組んだ河内洋騎手は、三冠すべての口取りで北野豊吉氏の遺影を掲げた

スティルインラブ
2000年5月2日生 牝 栗毛
父サンデーサイレンス
母ブラダマンテ(父Roberto)
馬主/榎ノースヒルズマネジメント
調教師/松元省一(栗東)
生産牧場/下河辺牧場
通算成績/16戦5勝
主な勝ち鞍/03秋華賞(GI)
03オクス(GI)
03桜花賞(GI)



トライアル敗戦で臨んだ桜花賞 アドマイヤグルーヴとの初対決

2003年3月8日、桜花賞トライアルのチューリップ賞で、1番人気に推されたスティルインラブは2着に敗れた。道中、ずっとインを通り、スムーズにレースを進めながら、直線、行き場を失い、外に持ち出して猛然と追い込んだが、オースミハルカにクビ差及ばなかったのだ。デビュー3戦目にしてはじめての黒星で、単勝1・7倍という断然人気を裏切ることになった。「自分のミスだ」

スティルインラブに乗った幸英明はうなだれた。4コーナーまでは思い通りだったが、直線での判断を誤った。つぎの桜花賞ではもう騎乗させてもらえないかもしれない。幸は乗り替わりを覚悟した。トライアルでミスをした騎手が、クラシック本番ではかの騎手に乗り替わる。自分も含め、何度もそういうケースを目にしてきた。そしてこの日の負けが、そうされても文句がいえない内容であることは、幸本人がよく承知していた。「しゃあないな。まあ、今日のことは、つぎのレースに活かしてくれたらいい」

スティルインラブを管理する松元省一調教師が、レースのあと、声をかけてくれた。叱責を覚悟していた幸にはありがたかった。

松元調教師は、幸が考えるほど、チューリップ賞の負けを重くとらえてはいなかった。負けたことは残念だが、課題だったゲートの出の悪さは見られなかったし、直線でも外に持ち出してよく伸びている。桜花賞本番につながるレースができたと考えていた。だから、叱責することもなく幸を迎えたの



2003
Fillies' Triple Crown Chronicle
すべて2番人気での三冠達成

スティルインラブ Still in Love

紆余曲折の向こうに

桜花賞トライアルから6連勝で初代牝馬三冠馬に輝いたメジロラモーヌとは異なり、「2代目」スティルインラブが歩んだのは山あり谷ありの牝馬三冠ロードだった。

※本誌別冊「Turf Hero 2003」に掲載した特別読切「スティルインラブ三冠ストーリー」を再編集しました。

阿部珠樹 = 文
text by Tamaki Abe

なんとしても責任は果たす。桜花賞は、幸にとって、普通のGIよりもはるかに重要な意味を持つレースになった。デビューして10年目という節目の年だった。穏やかな人柄、手堅い騎乗ぶり、甘いマスク。スターになる要素は十分に持っている騎手だった。だが、なにか足りない。つたない騎乗で罵声を浴びることは少なくとも、大向こうをうならせるような大胆なレースも少ない。いつGIをとっても不思議ではないといわれながら、いつのまにか10年目を迎えていた。同期や後輩がGIを勝つのが見て、徐々にあせりを感じはじめるようになった。

「分かれ目だ」
桜花賞本番は、スティルインラブと違う路線を歩んできたアドマイヤグルーヴが1番人気に推され、スティルインラブはわずかの差で1番人気を譲った。だが、幸が感じる重圧は断然の1番人気と変わりなかった。

トライアルでは敗戦にも冷静だった松元も、本番ではさすがに力が入った。「牝馬の大レースなら桜花賞だ。あの華やかな栄光を、自分も味わいたいし、馬にも味わわせてやりたい」
重圧を感じてはいたが、幸は冷静さを失っていなかった。前走の失敗に懲りて、大事に乗りすぎてもいけない。どこかで勝負に出なければ。
9番枠からスタートしたスティルイ



前を行く2頭の間を割り入り、アドマイヤグルーヴの追撃を封じ込めた。

H.Watanabe

桜花賞 2番人気

無敗の2歳女王ピースオブワールドが戦線離脱。混戦ムードも漂う中、僅差で2番人気に支持されたステイルインラブが力強く抜け出し、一冠目を奪取

ンラブは、3、4番手の好位置をスムーズに進んだ。桜花賞特有の速い流れだが、手ごたえはよい。残り600m過ぎ。前にはシューズトウショウとヤマツリリーの2頭がいる。「チューリップ賞と似たような感じになりました。もし2頭の間を割って入らなければ、直線できつとその2頭が壁になっていたでしょう」

その2頭の間を割って入り、すばらしい切れ味で抜け出した。残り200mで先頭に立つ。インでシューズトウショウが食い下がり、大外からアドマイヤグルーヴがものすごい脚で追い込んできたが、ステイルインラブの牙城は揺るがなかった。

はじめてGIを制して戻ってくると、幸は松元の目が少し潤んでいるのに気がついた。思わず自分もウルツと来た。牝馬にとって、桜花賞は特別な勲章だ。そして、それを授けてくれたことで、松元にとっても、幸にとっても、この桜花賞は特別なものになった。

距離不安が囁かれたオークス 桜花賞馬は屈辱的な2番人気

「どうして1番人気じゃないんだ」
草木明友は内心、かなり不満だった。オークスのパドック。人気を見ると、自分が担当しているステイルインラブは2番人気だった。しかも、1番人気のアドマイヤグルーヴが単勝1・7倍

が考える。ましてや騎乗するのは第一人者の武豊である。やや出遅れて届かなかった桜花賞のようなミスは二度としないだろう。

普通なら、桜花賞と同じように、先に動いて、不利のないように先手先手でレースを進めたい。今までの幸なら、おそらくそういうレースを選択しただろう。

「でも、ステイルインラブに乗ったときだけは、なぜか強気になれるんですよ。レースの前の日は緊張していても、当日馬にまたがると、気持ちも落ち着いて、大胆な騎乗ができる」

レースでの戦術について、松元から特に指示は受けていなかった。オークスに限らず、ステイルインラブに関しては、「こう乗れ」といったアドバイスはなかった。それだけに、責任は重い。余計、安全策を選択したくなるところだが、ライバルと真正面から力の勝負をするという思い切った作戦に迷いはなかった。

ゲートが開くと、ステイルインラブはスムーズに飛び出した。隣の枠のアドマイヤグルーヴが出遅れた。幸はあまり気合をつけず、中団やや後方に控えてレースを進めることにした。スタンド前の大歓声に驚き、アドマイヤグルーヴは折り合いを欠いて最後方に下がっている。1ハロン12秒台のつづくゆったりした流れの中、ステイルイン

に対し、ステイルインラブは大きく水を開けられた5・6倍というオッズである。以前敗れているならともかく、ステイルインラブは桜花賞でアドマイヤグルーヴに完勝している。にもかかわらず、差をつけられた2番人気というのには納得がいかなかった。たしかに草木から見ても、オークスの2400mは、不安がないわけではなかった。桜花賞の勝ち方が文句のつけようのないものだっただけに、1マイルが最適距離という懸念も捨てきれなかった。

だが、状態は万全だった。「使ったあとにガクッと来るような馬じゃないんです。かえって、レースを使ったあとは、力が抜けていい感じになる。桜花賞のあとでもそうでした。馬のほうがつぎのレースに向けて、先にリラックスして備えているみたいなんです」

レースで折り合いを欠くような馬でもない。桜花賞の直線で追い込んできたアドマイヤグルーヴの脚は、府中の長い直線では脅威だが、ステイルインラブだって、今の状態なら、絶対に無様なレースはしないはずだ。「見ていろ」

心の中でそうつぶやいた。28歳の草木は、高校生のとき、トウカイトイオーがジャパンカップを勝つ のを見て、競馬に惹かれるようになった。

ラブは自分のポジションをキープしながら進んだ。1000m通過61秒2という流れは、先行有利とも思えたが、幸は、ステイルインラブの脚と府中の直線の長さを考えれば、十分に先行集団はとらえられると踏んでいた。問題はアドマイヤグルーヴだ。ライバルは依然としてリズムをつかめず、後方でもがいている。直線に向けた。アドマイヤグルーヴはまだこない。そこで幸は目標を切り替えた。馬場の一番外を通って、先行馬をとらえにかかると、つぎつぎに10頭あまりの馬を交わし、最後には同じサンデーサイレンスの産駒チューニーをとらえた。交わしたあとでも緩めず追う。ゴールでは1馬身1/4の差がついていた。440mの牝馬とは思えない、豪快な勝ち方だった。アドマイヤグルーヴは最後まで流れに乗れず、7着に終わった。

直線ではさすがに力が入った松元だったが、幸とステイルインラブを迎えるときにはすっかり冷静さを取り戻していた。わずかに目元が潤んだ桜花賞とは対照的だった。

「幸は、味なレースをやったと思います。普通なら5、6番手の好位置を取りに行つて、前、前でレースを進めるところでしょうが、アドマイヤグルーヴに十分注意しながら、いったん下げて様子を見て、冷静にレースを進めた。桜花賞を取った自信がよいほうに

文句なく仕上がった担当馬の手綱を取りながら、草木はそういい聞かせた。

※

草木に引かれたステイルインラブにまたがって、幸はもう一度レースでの策を確認していた。少し離れた2番人気だったことは気づいていたが、特別くやしいとかは考えなかった。

「距離に不安があったのはたしかですからね。その分、逃げ道があったといえるかもしれません。負けたら距離があわなかったせいだってあきらめられますから。だから、オークスでは桜花賞より気楽に乗ることができました」
距離の適性が劣っていて負けたら仕方がない。そのことは考えずに、今の力を引き出すことだけ考えよう。

「桜花賞でのアドマイヤグルーヴの脚は確かにすごかった。でも、ステイルインラブも、桜花賞ではよく伸びていました。同じ脚は使えるという確信がありました。だからオークスでは、先にスタートするのはなく、アドマイヤグルーヴと同じところから追い出して勝負してみようと考えていたんです」

大胆というか、かなり挑発的な作戦ではあった。父が同じサンデーサイレンスといつても、ライバルのアドマイヤグルーヴの母はオークスを圧勝したエアグルーヴである。母がオークスを勝った名牝である分、アドマイヤグルーヴが血統的にも有利であるとは誰も

た。なんとか馬に関わる仕事がしたいと考え、卒業後、いくつかの牧場で修業を積んだあと、競馬学校の厩務員課程を経て、97年から松元厩舎で厩務員になった。憧れていたトウカイトイオーの厩舎にはいることができたのは偶然だったが、うれしいことだった。ステイルインラブを担当するまでは、オープン馬に当たったことはなかったが、サンデーサイレンスの産駒だとはいっても、ステイルインラブも、特に神経質になるようなことはなかった。

「扱いやすい馬なんですよ。サンデーサイレンスの子どもにはおとなしいし、カイバも少し時間はかかるけど、きっちり量は平らげる。ほんとにかわいいやつなんです」

桜花賞を勝って、スター街道を歩みだしたと思ったのに、オークスのレース前の評価は、まだファンが自分の担当馬をスターと認めていないことを示していた。

「牝馬にしては外見がちょっと悪いからかなあ」
皮膚病が出るなど、牝馬らしい華やかな美しさに欠けることは、草木も気になってきた（このあたり、ガールフレンドのルックスを気にする男の子みたいな気分なのかもしれない）。だが、馬は外見じゃない。レースでどれだけ力を見せられるかだ。ステイルインラブはオークスだって圧勝する力がある。

安全策ではなく真っ向勝負を選択。 二冠目の作戦に迷いはなかった。



H.Watanabe

スタートで立ち遅れたライバルを尻目に、中団後方に腰を落ち着かせたスタイルインラブが抜群の末脚を発揮して、二冠目のゴールを颯爽と駆け抜けた

オークス 2番人気

現れたと思いません。やはり騎手にとつて、GIをひとつ取るか取らないかは、大きな違いなんですよ」
オーナーやスタッフと勝利を喜びあひ、ファンの歓声に応えながら、松元は、頭の隅で、早くも秋のことを考えていた。秋、秋華賞をとれば、メジロラモーヌ以外にない逃げたことのない牝馬三冠の達成だ。そう何度も巡ってくるチャンスでないことは、松元も十分承知していた。

大敗の秋華賞トライアル レース後に陣営が変えたもの

松元省一はトウカイテイオーの調教師でもあった。トウカイテイオーは、皐月賞、ダービーを圧倒的な強さで制しながら、骨折のために菊花賞に出走することができなかった。無事に出走していれば、父のシンボリルドルフと同じく、無敗の三冠馬になったのは確実といわれている。

「トウカイテイオーのときは、自分も若かったから、ジョッキーにも厩務員にもつきつきりでうるさく指示を出したもんです」

だが、細心の注意を払っても、レースでの骨折はいかんともしがたかった。トウカイテイオーでの挫折と復活を経験して、松元の姿勢には変化が生まれた。「どんなにうるさくいつても、故障す

るときは故障する。状態がよくても、ちよつとしたアクシデントで負けることだってある。特にクラシックや三冠のような大きな仕事は、運が半分だと思っんです」

だから、桜花賞の前からクラシックに十分手が届くと確信しながら、スタイルインラブに関しては、幸にも草木にも細かい指示は与えなかった。大まかな方針を示すだけで、あとは彼らに任せた。もちろん、信頼するに足ると考えていたからでもあるが、トウカイテイオーでの経験を通して、調教師のできることは限られていると、ある種の諦念を持つようになったからでもある。

「自分の仕事は、万全な状態で馬をレースに送り出すこと。そこから先は運だ。力んでもどうなるものでもない」
だから、秋をめざす二冠馬を抱えていても、松元厩舎にはびりびりした神経質な空気は生じなかった。大レースでの実績がない幸や草木が存分に力を発揮できたのも、そうした雰囲気があったからだった。

かといって、ただほったらかしにしていたわけではもちろんない。オークスを取ったあと、夏をどう過ごすか。松元はいろいろ考え、オーナーとも相談した末に、栗東の厩舎に置いておくことを決めた。かつてのシンザンが京都の厩舎で夏を過ごし、ひどい夏バテ

にかかったのを見ていた松元に不安がないわけではなかったが、シンザンのころに比べれば、さまざまな設備も整っているんで、なんとかしのいでくれると考えたのだ。

幸い、天の恵みがあった。冷夏のおかげで、栗東で過ごしたスタイルインラブは、順調に調整スケジュールをこなし、カイバの食いも落ちることなく夏を乗り切った。

三冠にかかる秋華賞には、トライアルのローズステークスを叩いてから臨む。そのスケジュールは早くから決めていた。小さな数字ではない。

9月21日のローズステークス。スタイルインラブははじめてアドマイヤグルーヴをしのぐ1番人気でレースに臨んだ。体重はオークスに比べて22キ増えていた。小さな数字ではない。

「でも、自分の計算の範囲内の増加でした。太めではない。ほとんどは成長分だと思っていました。大体、うるさいところのある馬なら、そんなに体重が増えるわけがない。落ち着いて、カイバをしっかり食うからそれだけの体になるんです。体高も腹回りも、確かに大きくなっている気はした。でも、それくらい成長していなければほかの馬に追いつかれてしまう。牝馬というのは、割と早い時期に体重が固まってしまうものですが、ほんとうによく走る牝馬はかならず大きく体の増える時

M.Sakitani



夏の間も栗東トレーニング・センターに滞在。例年は蒸し暑い関西も、冷夏で夏負けの心配なく調整が進められた

しかし、レースが終わってみると、レース前と打って変わって、三人とも少し首を傾げないわけには行かなかった。

速いペースでもないのに、後続を大きく引き離し、ヤマカツリリーが逃げる。1番人気を背負うスタイルインラブとしては、自分で鈴を付けに行かなければならない苦しさがあった。それにしても、ヤマカツリリーをとらえきれなかった上に、アドマイヤグルーヴには目の覚めるような豪脚が使われた。それだけならまだしも、ベストアルバム、ピースオブワールドにも差し込ま

れたの5着という結果は、二冠馬にしてはふがいないものだった。草木などは「かなりショックだった」という。松元も「少し負けすぎかな」とは思った。だが、秋華賞まではほぼ1カ月の間隔がある。そこですることをつかりやれば、逆転するのむずかしくないだろうと考えていた。とにかくできることをやるだけだ。

「で、調教の中身を少し変えたんです。春は500回の角馬場を1ハロン20秒ぐらいで4本やったあと、坂路で追い切るといのがパターンだった。ローズステークスのときも、春のパターンをそのまま使いました。でも、秋華賞の前は角馬場でダクを踏んでから、2000回のウッドコースを1ハロン17秒ぐらいで行き、最後に坂路で時計を出すというふうに変えた。ウッドの分が強化されたわけです。ほんとうなら坂路で2本時計を出せるようになるのが理想なんです、それに少し近づけたわけです」

調教を強化したにもかかわらず、スタイルインラブは音をあげるどころか、けろっとしていた。その様子を見て、松元は、失いかけていた自信を取り戻した。

草木や松元に比べると、幸はローズステークスの負けをほとんど気にかけていなかった。体の状態よりも、久々のレースだったことが敗戦の主な原因

だと踏んでいたのだ。「数字の上で増えてはいたけど、乗った感触では絶好調でした。レースで負けたのは、ゲートで少し出遅れたことと、1、2コーナーで前の馬を向きにならなくて追いかけて、折り合いを欠いたのが原因だったんです」

ローズステークスの翌週、牡馬で三冠を狙うネオユニヴァースが菊花賞トライアルの神戸新聞杯に出走し、ステイルインラブと同じように敗れた。「ネオユニヴァースに乗っていた(福永)祐一に聞くと、やっぱりレース中に引かかっていたというんです。それでふたりとも久々だから引かかっていたんだと納得しました。一度使えばそうした点は解消するはずだし、こっちはしっかり気をつけて乗れば、力は発揮できると思っていました」

**史上2頭目の偉業に挑む秋華賞
ふたたび好敵手との一騎打ち**

秋華賞当日、草木はステイルインラブの体重が気になった。普通なら一度レースを使った上に、調教も強めているので、プラス22キだったローズステ

イクスより大きく減ったほうがいいように思われる。二ケタ減で万全というのが一般の見方だった。だが、草木はそうは考えていなかった。

「できれば体が減っても一ケタの範囲で取まってほしかったんです。前走の増加がほとんど成長分だとすれば二ケタも減るのはまずい。ちよっとだけ減ったあたりがちょうどよいと思っていました」

レース当日のステイルインラブの体重は、前走から4キ減の460キ。見た感じも、明らかに引き締まっている。「ねらいどおりだ」

馬を引く手に力がこもった。松元も仕上がりに具合には納得していた。いつもの通り、幸に策を授けたりもしなかった。

「というよりも、自由自在に動ける馬なので、特に作戦を立てることもなかったんです」

むしろ、どんなレースをしてくれるか、ファンのような関心を持ってレースを迎えていた。相手はトライアルを圧勝したアドマイヤグルーヴ1頭、それ以外には負けな思っていた。だ

から、馬場に入ってから、自分の馬とライバルの2頭しか見ていなかった。松元とは反対に、幸は、アドマイヤグルーヴのことはあまり考えていなかった。

「それよりもローズステークスで逃げた粘ったヤマカツリリーのほうが気になりました。コーナーを4回回るコースで、楽に逃がすと厄介だった」

だが、いざゲートが開くと、トライアルで逃げたヤマカツリリーのハナを叩き、マイネサマンサが先頭に立った。マイネサマンサはスローに落とさず、よどみのないペースでレースを引っ張って行く。ステイルインラブは中団につける。

「ヤマカツリリー以外の馬が逃げたので、アレツという感じはありません」

逃げ馬の力がはつきりしないので、仕掛けどころがむずかしくなったのだ。ただ、折り合いを欠くようなところは一度もなかった。一度使った成果がはつきり現れていた。

レースの流れは途中で落ち着いた。前の馬は気持ちよさそうに逃げている。3コーナーの下りから、

まくり気味に仕掛ける。ところが、4コーナーに差し掛かると、反応がよくない。幸はひやっとした。夏を越して、ズブくなったのか。そ



M.Watabe
牝馬三冠レースのすべてでアドマイヤグルーヴに続く2番人気に甘んじたが、確かな末脚を武器に史上2頭目の快挙をなし遂げた

予想通りアドマイヤグルーヴが追い込んできたが、今日のステイルインラブなら負けな

Still in Love

F.Nakao

ステイルインラブ 三冠までの成績

年月日	レース名	競馬場	距離(キ)	馬場	騎手	着順	人気	タイム
2002.11.30	新馬	阪神	芝1400	良	幸 英明	1	1	1:22.2
2003. 1.19	紅梅S(OP)	京都	芝1400	良	幸 英明	1	2	1:22.1
3. 8	チューリップ賞(GIII)	阪神	芝1600	稍重	幸 英明	2	1	1:36.0
4.13	桜花賞(GI)	阪神	芝1600	良	幸 英明	1	2	1:33.9
5.25	オークス(GI)	東京	芝2400	良	幸 英明	1	2	2:27.5
9.21	ローズS(GII)	阪神	芝2000	良	幸 英明	5	1	2:02.0
10.19	秋華賞(GI)	京都	芝2000	良	幸 英明	1	2	1:59.1

秋華賞 2番人気

内で粘るヤマカツリリーをとらえると、外からアドマイヤグルーヴが迫ってくる。しかし、ステイルインラブは最後まで先頭を譲らず牝馬三冠を制覇

アドマイヤグルーヴが2番手にあがったとき、スタンドで見ていた松元は、「そら来た」と思った。はじめから、この一騎打ちを予想していたのだ。だが、接戦になっても、今日のステイルインラブなら負けな。自信があつたので、大声を出すようなこともなかった。勝利を確かめて席を立つ。その時、掲示板を見てヤマカツリリーが3着に入ったのを知った。ヤマカツリリーは弟茂樹の管理馬である。もうちよっとで、GI兄弟ワンツーフィニッシュというところだったのだ。

「でも、レース中はまったく気がつきませんでしたね。落ち着いているつもりだったんですが、やっぱりどこかで興奮してたんでしょうか」

つぎつぎに差し出される祝福の握手に応えながら、ステイルインラブを迎えら。トウカイテイオーでなし遂げられなかった三冠制覇を、とうとうなし遂げたのだ。しかし、桜花賞のときのような突き上げてくる感激ではない。幸も草木も笑顔だが、ふたりとも我を忘れるという感じではなかった。

「これだけのことをやってのける資質を持った馬だ」

三冠という偉業も、さほど不思議なことではない。三人の冷静な喜び方には、ステイルインラブという馬への深い信頼が現れていた。

(文中一部敬称略)

アーモンドアイ

2015年3月10日生 牝 鹿毛
父ロードカナロア
母フサイチパンドラ
(父サンデーサイレンス)
馬主/南シルクレーシング
調教師/国枝栄(美浦)
生産牧場/ノーザンファーム
通算成績/15戦11勝(うち海外1戦1勝)
主な勝ち鞍/18・20ジャパンC(G I)
19・20天皇賞(秋)(G I)
20ヴィクトリアマイル(G I)
19ドバイターフ(UAE-G I)
18秋華賞(G I)
18オークス(G I)
18桜花賞(G I)
18シンザン記念(G III)

前哨戦できっちり状態を整え、本番で結果を残したアパパネ。ぶっつけ本番で三冠レースすべてを勝ち切ったアーモンドアイ。異なる手法で誕生した2頭の牝馬三冠馬を、国枝栄調教師はいかにして手掛けたのか。

2018

Fillies' Triple Crown Chronicle

常識を破るローテーション

アーモンドアイ
Almond Eye

J.Fukuda



特性見抜き導いた「方程式」

アパパネ

2007年4月20日生 牝 鹿毛
父キングカメハメハ
母ソルティビッド
(父Salt Lake)
馬主/金子真人ホールディングス(株)
調教師/国枝栄(美浦)
生産牧場/ノーザンファーム
通算成績/19戦7勝(うち海外1戦0勝)
主な勝ち鞍/11ヴィクトリアマイル(G I)
10秋華賞(G I)
10オークス(G I)
10桜花賞(G I)
09阪神ジュベナイルフィリーズ(Jpn I)

2010

Fillies' Triple Crown Chronicle

大一番で勝負強さを発揮

アパパネ
Apapane

有吉正徳 = 文
text by Masanori Ariyoshi

Y.Kunihira

Japan — アパバネ

厩舎として積み上げられてきた
「栗東留学」のノウハウ

アパバネは桜花賞馬になれるだけの能力を秘めている。そう感じた国枝栄調教師は一計を案じた。「じゃあアパバネを関西馬にしてしまおう」。

1980年代後半から2000年代初めまで桜花賞は滋賀県栗東トレーニング・センター(栗東トレセン)を本拠にする関西馬の独壇場だった。

茨城県的美浦トレーニング・センター(美浦トレセン)をベースにする関東馬の桜花賞制覇は1986年のメジロラモーンを最後に途絶え、87年のマツクスビューティから03年のスタイルイ

ンラブまで17年もの間、桜花賞馬のタイトルは関西馬の頭上に輝き続けた。

04年にダンスインザムードが関東馬の連敗にストップをかけ、06年にもキストウヘヴンが続いた。しかし、その後は再び3連敗。そんな状況でアパバネは10年の桜花賞を迎えた。

関西馬が桜花賞に強い理由はいくつか考えられる。最大の要因は桜花賞が栗東トレセンから近い阪神競馬場で行われることだろう。関東馬が桜花賞に出走する場合、レースの数日前に美浦

トレセンから阪神競馬場までの長距離輸送がある。直前輸送による体調変化のリスクを下げるため、国枝調教師は関西圏のレースに管理馬を出走させる場合、栗東トレセンに送り込む方法を



阪神JFではレース前から栗東に滞在し、結果を残した。この成功体験が、アパバネの方針を決定づけた

阪神ジュベナイルフィリーズへの
挑戦は「関西馬化」の第一歩

09年7月、アパバネは福島競馬場でデビューした。勝ち馬から5馬身離された3着だった。それでも国枝調教師が気落ちすることはなかった。まだ体ができていなかった。その後十分にレース間隔をあげ、成長を促した。2戦目は10月の東京競馬場。しっかりと餌い葉を食べた結果、体重はデビュー戦の45.2kgから24kgも増え、47.6kgになっていった。レースも好位から抜

出す危ない内容で初勝利を飾った。アパバネは「筋肉質の体で男馬のようだった」と国枝調教師は回想する。デリケートなタイプが多い牝馬にしては体調の変化は少なく、調教もしつかりとできた。引退年となった12年4月の阪神牝馬Sで体重が自己最高の50.4kgになったように、餌い葉が実になるタイプでもあった。だから大一番を迎えるに当たり、前哨戦が必要だった。調教だけではどうしても仕上がりが切

らなところがあった。3戦目の赤松賞を快勝した後、阪神ジュベナイルフィリーズ(以下阪神JF)出走のため栗東へ向かった。アパバネにとって初めての栗東留学だった。11月のうちに栗東へ移動し、12月13日の阪神JFに備えた。環境が変わっても影響を受けることはなかった。赤松賞から体重を4kg増やし、47.2kgで出走。大外18番枠からスタートを切ると、蛭名正義騎手の手綱に導かれ、徐々にポジションを上げた。最後の直線に向くと、ぽっかりと空いた内に飛び込んだ。力強い末脚を繰り出し、1着でゴールした。

阪神JFの関東馬の連敗を「4」で止めた。前年、国枝厩舎はダノンベールを送り込み、2着に終わっていた。その雪辱も果たした。この年行われた2歳重賞11レースで関東馬が優勝した唯一のレースでもあった。

阪神JFへの挑戦はアパバネの「関西馬化」の第一歩であり、成功したことによって、その後のローテーションにも影響を与えた。栗東留学が繰り返されることになる。

実戦を経験して臨戦態勢に
三冠達成に自信を深める

年が明けて10年、アパバネの3歳初戦はチューリップ賞と決まった。3月のチューリップ賞、4月の桜花賞に備



K.Kamite

桜花賞 1番人気

栗東滞在で調子を上げて挑んだ本番。逃げ粘るオウケンサクラをゴール手前で捉えて勝利。牝馬三冠の挑戦権を手にした

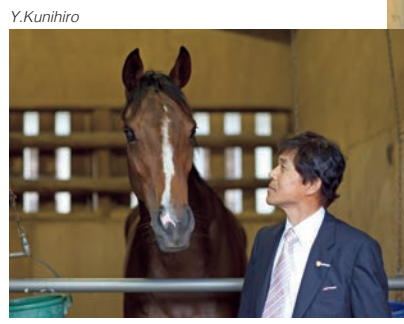


Y.Hamano

桜花賞から1カ月半の間に
体は前後に伸び、長距離に
対応できる体形に変化していた。

オークス 1番人気

一度は抜け出したアパバネ。その内からサンテミリオンが盛り返し、2頭は馬体を並べてゴールへ。長い写真判定の結果、JRA史上初となるGIでの同着という結末を迎えた



Y.Kunihiro
オークスの激闘を終えたアパバネをいたわる国枝調教師

え、2月中旬には栗東トレセンに移動した。チューリップ賞は2着に終わったが、レースぶりは悪くなかった。デビュー5戦目にして初めて経験する重馬場にも対応した。本番・桜花賞に向けて手応えを感じさせた。チューリップ賞後も栗東トレセンに居残ったアパバネは、すっかり環境にも慣れ、ぐんぐんと調子を上げていった。

4月11日、第70回桜花賞では単勝オッズ2・8倍の1倍人気に支持された。晴れの良馬場。18頭立ての9番枠からスタートしたアパバネは4、5番手につけた。先手を奪ったオウケンサクラが絶妙なペースに持ち込み、逃げ込みを図る。その外から末脚を伸ばし、最後はオウケンサクラを捉え、半馬身差をつけて先頭でゴールラインを駆け抜けた。栗東留学策が実った瞬間だった。牝馬三冠の第一関門でつまづいていた関東馬が牝馬三冠の権利を手にした。

二冠目のオークスはGIレース史上初の1着同着となり、サンテミリオンと優勝を分け合った。桜花賞から1カ月半の間にアパバネの体は前後に伸び、2400mの長距離に対応できる体形に変化していたという。

綱渡りのオークスでタイトルをつかみ、アパバネは史上3頭目の牝馬三冠に王手をかけた。10年の夏は高温が続き、気象庁はこの年の猛暑を30年に1

度の異常気象と認定した。

9月9日に栗東入り。同19日のローズSに備えた。猛暑にもへこたれないアパパネは元気いっぱいだった。調教を重ねても体は絞れず、ローズSにはオークスからプラス24kgの体重494kgで出てきた。ゴール前で伸びてはいるのだが、4着に終わった。

ローズSで敗れたが、実戦を一度経験すると「やる気スイッチ」が入るアパパネは秋華賞に向けて臨戦態勢に入った。調教の動きも鋭さを増し、国枝調教師は三冠達成に自信を深めていったという。

ローズSから体重を4kg減らして、第15回秋華賞に出走した。中団を進んだアパパネは最後の直線で大外を豪快に伸び、2着以下を抑えて優勝した。メジロラモース、ステイルインラブに次ぐ史上3頭目の牝馬三冠の偉業を達成した。

アパパネは香港遠征も含め現役生活で19戦7勝の成績を残した。7勝のうち重賞は5勝。阪神JF、桜花賞、オークス、秋華賞、ヴィクトリアマイルとすべてGIレースで、GII、GIIIでは1勝も挙げていない。これぞ典型的な「叩き良化型」。狙った大一番で勝負さを発揮した。

Almond Eye — アーモンドアイ — アパパネとは違うルートで 牝馬三冠の頂点を攻める

そんな国枝調教師の下にアパパネの牝馬三冠達成から8年後、再び桜花賞、オークス、秋華賞を狙える牝馬が現れた。それがアーモンドアイだ。

同じ山の頂を目指すのにいくつかの登山ルートがあるように、牝馬三冠という頂点を今回はアパパネとは別のルートから攻めた。アパパネで一度登頂に成功した国枝調教師だったが、アーモンドアイではまったく違うアプローチで偉業に挑み、成功した。アーモンドアイとの戦いでは、アパパネでうまくいった栗東留学も前哨戦も選択しなかった。アーモンドアイはアパパネとはまったくタイプの違い競走馬だった。

美浦トレセンの国枝厩舎に入り、デビューに向けて調教が進むと、アーモンドアイは抜群の動きを披露した。年上の馬と併せ馬をしても互角以上の動きをした。デビュー戦は17年8月の新潟競馬場となった。ロードカナロアの娘ということで、デビュー戦には芝1400mの新馬戦が選ばれた。だが、これは失敗だった。まさかの2着。終わってみれば距離不足だった。エンジンがかかった時にはすでに1着馬がゴールに差しかかっていた。

そうしたアパパネの特性を早くから見抜き、そこに栗東留学という手法を織り交ぜた国枝調教師のアパパネ管理術は牝馬三冠達成に大いに寄与した。「アパパネには超一流の能力があったし、男馬のようにしっかりした体質もあった」と国枝調教師は振り返る。



ローズS後、臨戦態勢に入ったアパパネ。滞在していた栗東での調教の動きも鋭さを増していった

特性を見抜き、栗東留学の手法を織り交ぜた管理術は牝馬三冠達成に大いに寄与した。

秋華賞 1番人気

直線では大外に持ち出し、力強く抜け出す盤石のレースぶり。国枝調教師は「三冠の中で一番安心して見ることができた」と振り返った

K. Kamite



アパパネの牝馬三冠達成を祝い用意された横断幕

アパパネ 三冠までの成績

年月日	レース名	競馬場	距離(m)	馬場	騎手	着順	人気	タイム
2009. 7. 5	新馬	福島	芝1800	良	蛸名正義	3	3	1:51.5
10.31	未勝利	東京	芝1600	良	蛸名正義	1	3	1:35.9
11.15	赤松賞(500万下)	東京	芝1600	良	蛸名正義	1	3	R1:34.5
12.13	阪神ジュベナイルフィリーズ(Jpn I)	阪神	芝1600	良	蛸名正義	1	2	1:34.9
2010. 3. 6	チューリップ賞(G III)	阪神	芝1600	重	蛸名正義	2	1	1:36.2
4.11	桜花賞(G I)	阪神	芝1600	良	蛸名正義	1	1	1:33.3
5.23	オークス(G I)	東京	芝2400	稍重	蛸名正義	1	1	2:29.9
9.19	ローズS(G II)	阪神	芝1800	良	蛸名正義	4	1	1:46.0
10.17	秋華賞(G I)	京都	芝2000	良	蛸名正義	1	1	1:58.4

10月の東京競馬場芝1600mで2戦目を迎え、余裕十分に勝ち上がったのは先輩のアパネと同じだった。その後、アーモンドアイの競走馬人生を決める出来事が起きた。

2歳のうちにもう1戦する予定だったが、体調が整わず、デビュー3戦目は年が明けた18年1月、京都競馬場で行われる重賞シンザン記念ということになった。

シンザン記念ではいくつもの課題があった。まずは約3カ月ぶりの実戦というレース間隔。二つ目は美浦トレセ



S.Katsura
久しぶりの実戦や長距離輸送。いくつもの課題を克服したシンザン記念の勝利が、「ぶっつけ本番」の選択につながった

ンから京都競馬場までの直前での長距離輸送。それに初コース。さらにはレース当日、雨に見舞われ、稍重という馬場コンディションもアーモンドアイの前に立ちはだかった。

だが終わってみれば、すべての不安は杞憂だった。

レースは出遅れて11頭立ての最後方からの追走となった。最後の直線に向いても後方から2番手という位置取りと、トフ・ルメール騎手に代わって手綱を取っていた戸崎圭太騎手に促されると、

直前輸送や初コース。 シンザン記念で課題を克服し、 牝馬三冠への道のは決まった。

末脚にスイッチが入った。あつという間に先行馬たちを飲み込み、先頭でゴールした。このシンザン記念の本当の価値がわかるのは、レース後に発表されたラップタイムを見てからだった。

芝1600mで行われたレースは稍重という条件もあって、前半からゆったりとした流れになった。そのため最後はゴールに向かって加速する完全な上りの競馬になっていたのだ。後半800mの200mごとのラップは12秒8-12秒1-11秒7-11秒5だ。このペースを最後方から差し切つてしまふのだから恐ろしいほどの破壊力だ。

直前輸送や初コース。シンザン記念でさまざまな課題を一挙に克服したことで、アーモンドアイの牝馬三冠への道のは決まったといっている。ぶっつけ本番。それが可能だということがシンザン記念で分かった。

その後の競馬界に大きな影響を与えることになるアーモンドアイの画期的な牝馬三冠ローテーションがスタートした。

その後のモデルケースになった アーモンドアイの歩み

1月8日のシンザン記念を終えたアーモンドアイは4月8日の桜花賞に直接向かうことになった。それまでの常識では、前哨戦のチューリップ賞やフイリズレビューをステップに桜花賞へ向かうことがセオリーだった。アーモンドアイ以前にもっともレース間隔のあいた桜花賞馬は11年のマルセリーナだった。マルセリーナは2月5日のエルフィンSで優勝し、中63日で臨んだ4月10日の桜花賞を制していた。

シンザン記念から中89日の桜花賞出走という試みは、競馬の常識に対するチャレンジでもあった。ところが国枝調教師にはそんな硬さは見られなかった。「アーモンドアイは別格と、調教でもいいほどの能力があったし、調教でしっかり仕上げれば、レース間隔に関係なく走ってくれることはわかっていました」という。前哨戦をステップに調子を上げていく先輩のアパネとは違うタイプだった。

第78回桜花賞でアーモンドアイは2番人気だった。国内14戦で唯一1番人気ではなかったレースだ。1番人気はラッキーライラック。阪神JFを制した前年の2歳女王は前哨戦のチューリップ賞も快勝して4戦4勝の成績で桜花賞を迎えていた。それまでの常識でいえば、桜花賞馬にふさわしいのはアーモンドアイではなくラッキーライラックだった。

けれどもレースはアーモンドアイの独演会だった。4コーナー16番手というポジションから最後の直線だけで先行馬をまとめてかわし、ゴールではラッキーライラックに1馬身4分の3差

M.Seki



Y.Hatanaka



牝馬三冠の第一関門をクリアした直後のアーモンドアイと国枝調教師

K.Yamamoto



前走から中89日での出走。けた違いの末脚で差し切り勝ちし、これまでにあった「前哨戦を使う」という常識をいとも簡単に打ち破った

桜花賞 2番人気

前半に掛かる場面もあったが、好位追走から抜け出して、2着に2馬身差の快勝。血統面から距離を不安視する向きもあったが、全くの杞憂に終わった

オークス 1番人気

Shabane & Amnord Eye



S.Suzuki



秋華賞に向け、アーモンドアイは夏場をノーザンファーム天栄で過ごし、調整を進めた

をつけていた。アーモンドアイの上がり3ハロンは33秒2。2番目に速いト1センブレスが34秒2だから1秒もの開きがあった。けた違いだった。ラックキーライラックは抵抗のしようもなかった。

オークスは優勝後に熱中症のような症状を見せ、心配された。走ることが大好きで、つい能力の限界まで出してしまうのがアーモンドアイの長所でもあり欠点でもあった。頑張りすぎて、ふらふらになったのだ。ただ年齢を重ねるごとに、そうした症状もなくなっていた。

誰もが盤石だと信じていた秋華賞だが、三冠最大のピンチに襲われていた。夏を越してパワーアップしたアーモンドアイは後肢の踏み込みが深くなっていた。そのため前肢と後肢がぶつかる「追突」という現象が起きるようになっていた。同じようなことは戦後初の三冠馬シンザンでも起きたことが知られる。アーモンドアイは追突で右前肢のひづめを痛めた。ひづめをかばいながらのトレーニングだったため体調をピークに仕上げることはできなかった。秋

桜花賞、オークス、秋華賞とも2着に1馬身以上の差をつけて優勝したのは初めてだった。

華賞当日も装鞍所の時点から激しく入れ込んだという。それまでにはいほどテンションが上がリ、馬装をするのにも手間取った。心身ともに不安を残したまま秋華賞に出走した。

だが終わってみれば、2着のミッキ1チャームに1馬身半差をつける快勝で史上5頭目の牝馬三冠を達成した。

桜花賞、オークス、秋華賞とも2着に1馬身以上の差をつけて優勝したのはアーモンドアイが初めてだった。

シンザン記念↓桜花賞↓オークス↓秋華賞というアーモンドアイの歩みはその後のモデルケースになった。19年の桜花賞ではグランアレグリアが前年の朝日杯フューチュリティSから中111日での優勝という新記録を打ち立て、今年のソダシはグランアレグリアを上回る中118日での桜花賞制覇を成し遂げた。20年に史上6頭目の牝馬三冠を達成したデアリングタクトもエルフィンS↓桜花賞↓オークス↓秋華賞とアーモンドアイをなぞるようなロテーションで偉業をかなえた。

※ アバパネとアーモンドアイ。2頭の三冠牝馬を育てた国枝調教師は今年、有力候補2頭を秋華賞に送り出そうとしている。オークス2着のアカイトリノムスメとダービー5着のサトノレイナスである。

アカイトリノムスメはあのアバパネの4番目の仔で初めての牝馬だ。4着だった桜花賞の前にクイーンCを走ったように、前哨戦を使われて本番で調子を上げていくのは母と似ている。秋華賞に向けても前哨戦を挟む計画だ。

サトノレイナスは桜花賞でソダシのクビ差2着になった後、牡馬が相手のダービーに向かった。いつも以上にエ

キサイトし、予想より前めの位置でレースを運び、最後はスタミナ切れした。それでも牡馬相手の5着は評価できる。秋華賞にはぶつけ本番で臨む予定だ。

この2頭をながめていると、馬のタイプ、ローテーションはそれぞれ厩舎の先輩三冠牝馬と重なる。アカイトリノムスメは母でもあるアバパネであり、サトノレイナスはアーモンドアイだ。初のG1制覇を目指す2頭はそれぞれ違うアプローチで秋華賞に出走する。その結果とともに出走過程にも興味は尽きない。

秋華賞 1番人気

体調面や当日の入れ込みなど、心身ともに不安が残る中で迎えた。しかし、直線で逃げたミッキチャームを軽々とかわし、史上5頭目の牝馬三冠を達成した

アーモンドアイ 三冠までの成績

年月日	レース名	競馬場	距離(種)	馬場	騎手	着順	人気	タイム
2017.8.6	新馬	新潟	芝1400	良	C.ルメール	2	1	1:24.0
10.8	未勝利	東京	芝1600	良	C.ルメール	1	1	1:35.1
2018.1.8	シンザン記念(GⅢ)	京都	芝1600	稍重	戸崎圭太	1	1	1:37.1
4.8	桜花賞(GⅠ)	阪神	芝1600	良	C.ルメール	1	2	1:33.1
5.20	オークス(GⅠ)	東京	芝2400	良	C.ルメール	1	1	2:23.8
10.14	秋華賞(GⅠ)	京都	芝2000	良	C.ルメール	1	1	1:58.5



2012

Fillies' Triple Crown Chronicle

父娘三冠制覇の快挙

ジェンティルドンナ *Gentildonna*

貴婦人と歩んだ頂点への道

父ディーピンパクト譲りの決め手を武器に、
史上4頭目の牝馬三冠に輝いたジェンティルドンナ。
その凄さを誰よりも間近で感じてきた2人の調教助手の言葉から、
彼女の歩みを振り返る。

橋本樹理 = 文
text by Juri Hashimoto



コースでの調教を開始して
強心臓ぶりを感ずる

「普通の馬でした」
2歳の秋に栗東トレンセンに入厩してきたジェンテイルドンナに対する担当の日迫真吾調教助手、調教役の井上泰平調教助手の第一印象は共通していた。しかし、「普通の馬」は1周1800mのCウッドコースへ初めて入れた途端、豹変した。まだ入厩して1カ月も経過していない2歳牝馬なのに、1周半のキャンターを難なくこなした。「全然息が乱れていない。この馬、心臓がおかしいんじゃないかな」。井上調教助手は馬の背で聞こえてくる楽な息遣いに違いを感じ取っていた。

日迫調教助手にはこの出来事に加え、さらなる驚きがあった。ジェンテイルドンナが使っていた腹帯の長さは1300m。後に、放牧帰りで馬体重が500kg近くになった時には135kgのものを使用していたという。「人や厩舎によってつけ方が変わるから自分の基準だけで、牝馬で125kgなら立派な方。470kgの馬でも130kgってなかなかつかない。あの馬はやっぱり胸囲がデカいな。胸囲があるってことは心臓とか肺の容量がデカいんじゃないかな」。馬は肺で走り、心臓で頑張るとも言われるが、そのエンジンを積んだ胸の深さに予感めいたものがあつた。

新馬戦は2着に敗れたものの、未勝利、シンザン記念を連勝。桜花賞トライアルのチューリップ賞へ向けて視界良好と思われたが、そこでアクシデントが発生した。3週前に熱発してしまつたのだ。その頃、ようやくカイバ食いが良くなってきていたのに、夜カイバの残り方がいつもと違っていた。すぐさま検温すると熱発していることが判明。1週間近く馬場入りできず、追い切りも坂路の2本のみ。追い切り日以外に井上調教助手より体格のある日迫調教助手が乗って負荷をかけたが、何とか間に合った程度だった。さすがに苦戦を覚悟した。しかし、直線で前



S.Katsura

担当の日迫真吾調教助手(右)、調教役の井上泰平調教助手(左から2人目)ともに、デビュー前から素質を感じ取っていた

オークスでの思わぬ低評価も
揺るがなかった自信

桜花賞戦線と違い、オークスは順風満帆だった。だが、戦前から評価は上がらなかった。全姉ドナウブルーがマイルを主戦場にしていただけ、主戦の岩田康誠騎手が騎乗停止になり、初騎乗の川田将雅騎手へ乗り替わっていたことなども影響したように思われた。しかし、周囲の評価とは反対に陣営の自信は揺るがなかった。「牝馬で同じメンバーでやっても負けることはない」。鞍下から伝わる状態の良さに井上調教助手は確かな手応えを抱いていた。川田騎手には「たぶん勝てると思うから(馬を)信じてくれ」と伝えた。距離延長についても聞かれたが、「大丈夫。引っかかっているように見えるけど、頭が高いだけ」と不安を打ち消した。

オークス前日。東京競馬場への輸送前に井上調教助手がまたがり、馬房前で15分ほどの運動を消化した。通常は輸送前に運動を行わないが、馬装して体をほぐし、洗い場で体を洗ってカイバをつけるというルーティンをこなすことで、これから競馬に行くことを悟られないようにしたのだ。「調教をしないでカイバを食べさせると、レースだと思ってしまう」。日迫調教助手の愛馬への気遣いだった。いざ、レース。前哨戦のフローラS

Y.Kunihiro



桜花賞 2番人気

シンザン記念で重賞初制覇を飾るも、続くチューリップ賞(4着)前に熱発。1番人気はジョウドヴィーヴルに譲るが、調子を上げ挑んだ晴れ舞台で躍動

S.Sakaguchi



オークス 3番人気

初の長距離輸送、岩田康誠騎手の騎乗停止による乗り替わりなど不安材料も。井上調教助手は鞍上の川田将雅騎手を「信じてくれ」と送り出したという

を圧勝したミッドサマーフェアが1番人気の3・3倍。人気を分け合う形でヴィルシーナが3・6倍の2番人気。ジェンテイルドンナは当日になっても2頭に少し置かれた5・6倍の3番人気にとどまった。パドックで汗をかき、ゲート裏では落ち着きがない。人気に影響したかもしれないテンションの高

屈辱を圧勝ではね返し、
関係者は満面の笑みで二冠を
示すピースサインをつくった。

さは、そういうキャラクターだと思えば、井上調教助手や日迫調教助手も不安に感じなかった。
マイネエポナが飛ばして逃げ、前半1000m通過が59秒1と速めの流れ。川田騎手はいつもより少し後ろ14番手をキープした。直線に入ってから外に出すと、最後は抑えたまま5馬身突き抜けた。ふたつ目は、追えばどこまでも伸びていきそうな末脚で従来の記録を1秒7縮めるレースレコード。「勝ち方もすごかったのでスカッとしたというか、爽快だった」と日迫調教助手。歴代の三冠牝馬のうち三冠戦線で3番人気以下の評価だったのは、ジェンテイルドンナしかない。屈辱を圧勝ではね返し、関係者は満面の笑みで二冠を示すピースサインをつくった。

三冠制覇に立ちほだかった 2つの思わぬ試練

「そこからはプレッシャーやっただですもう押しつぶされそうなくらい」。オークスが終わり、馬は放牧に出ているも井上調教助手の頭はジェンテイルドンナのことではいっぱいだった。三冠最終戦は京都内回りの2000m。「負けたらどうしよう」と、トリッキーなコースがより不安を大きくさせる。
8月1日に帰厩し、三冠に向けた戦いが本格的に始まった。井上調教助手は馬にも伝わりかねない自分自身の不



2020

Fillies' Triple Crown Chronicle

無敗で牝馬三冠を達成

デアリングタクト *Daring Tact*

「おじさん」の夢が生んだ歴史的名馬

コロナ禍により無観客となった春のクラシック。
そして、人数を限定して有観客で行われた牝馬三冠最終戦。
異例の開催下で偉業を成し遂げたデアリングタクトが、
故郷へ与えたインパクトは計り知れないものだった。

軍士門隼夫 = 文
text by Hayao Gundomon

苦小牧市の育成牧場バイオニアファームで、セレクトセールに上場される前の1歳時のデアリングタクトについて取材していると、ニュージーランド出身の佐久間エイドリアン場長が思い出したように自分のスマホを開いて、一枚の写真を見せてくれた。写っているのは馬運車で、車体には大きく手書きで、こんな言葉が書いてあった。
「My dream is to produce a historic horses in the future.」

私の夢は、将来、歴史的な名馬を生産することです。意味としては、そんな感じだろうか。落書きのようにぶつきたらばうに、豪快な筆致で書かれたその文字は力強く、書いた人の熱い思いがそのまま形になったようだった。

馬運車はデアリングタクトを生産した長谷川牧場のもので、書いたのは代表の長谷川文雄さんとエイドリアンさんは教えてくれた。2018年、バイオニアファームはその長谷川さんから1歳のデアリングタクトを預かり、約3カ月、セレクトセール上場に向けて仕上げを施したのだった。

「長谷川さんはすごく面白い性格の人で、馬が大好きというオーラとプライド、そしてしっかりした技術を持っています。本当のホースマンです」

初めてその馬運車を見たとき、エイドリアンさんは感動したという。「本当に古いトラックで、若い頃の

ナジーがここに書いてあるんだ、と感
じました。でもいつ書いたのか訊いて
も教えてくれないし、本人はメディア
にこの話をしようとしないので、こ
うやって私がどんな言うようにして
るんです(笑)。だって、その夢が現実
になったんですよ! デアリングタクト
は、歴史的な名馬なんですから!」

**いつの日か歴史的な名馬を——
前向きな姿勢が呼び寄せた好機**

日高町にある長谷川牧場は、生産頭
数が年間10頭に満たない小さな牧場だ。
デアリングタクトの前に、牝馬三冠
馬は5頭出ている。メジロモータは
メジロ牧場。ステイルインラブは下河
辺牧場。アパパネ、ジェンティルド
ナ、アーモンドアイはノーザンファ
ーム。いずれも掛け値なしに名門と呼
べる大牧場の生まれだ。

そんな中であって、長谷川牧場のよ
うな牧場が無敗の牝馬三冠馬という歴
史的な名馬を産み出したことは、いくら
讚えても讚えすぎということはない。
この規模の牧場の馬がGIを勝つだけ
でもたいへんなことなのに、世代の優
駿たちが一生に一度のチャンスに殺到
するレースを、三度にわたって勝ち切
る——しかもデビューから無敗とい
うのは、まさに奇跡的な偉業だ。

長谷川牧場は1948年創業で、現
在70歳の長谷川さんが2代目になる。

当初はアラブの牧場で、サラブレッド
の生産を始めた頃はアラブと比べて繊
細で手間がかかることに驚いたとい
う。活躍馬には93年マイルチャンピオン
シップ2着のイイデザオウ、オープン
特別のパラダイスSや富士Sを勝った
ビコーアルファードなどがいる。ただ、
生産馬のJRAの勝利は年間6勝が最
高。未勝利の年もある。重賞勝ち馬は
10年小倉大賞典のオースミスパークの
み。デアリングタクトが10年ぶり2頭
目で、そして初のGI馬だった。

厩舎でジャズを流して馬をリラック
スさせるなど、独自の、しかしあくま
で馬本位のやり方で取り組みながら、
いつの日か歴史的な名馬を、と思いつ
てきた。そんな前向きな姿勢が呼び寄
せたのが、デアリングタクトの母であ
るデアリングバードの購入だった。

電話で話を伺った本誌編集者に、長
谷川さんは「チャンスはどこにあるか
わからない。まさにデアリングバード
がそうです」と感慨深げに言った。

購入したのは14年のジェイエス繁殖
牝馬セールだった。1戦未勝利で引退
したばかりだった同馬は、父がキング
カメハメハ、母はサンデーサイレンス
産駒で重賞3勝のデアリングハートと
いう良血にもかかわらず、360万円
(税別、以下同)という安価で落札でき
た。長谷川さんは「良い顔をしている
馬だなと思ったけど、体に欠点があっ

れでコンサイニングを任せました」

パイオニアファームの仕上げを経て
1歳セリに登場したデアリングタクト
は、今度は1200万円でノルマンデ
ーファームに落札されたのだった。

**小さな牧場が歴史的な名馬を送り、
日高地方にいい流れを呼び込む**

オーナーが決まり、ノルマンデー
ファームの施設で育成を施されたデア
リングタクトは、栗東の杉山晴紀厩舎
に入厩。2歳11月のデビュー勝ちを、
長谷川さんはテレビで観ていたが「勝

つとは思ってなかったな」と笑う。

「期待はしますよ。でも新馬戦は社台
グループが強いし、なかなか勝てない
んです。だから嬉しかったです」

年明けのエルフィンSは4馬身差の
圧勝で、一気に桜花賞の有力候補に。
「あれはすごかったな。あのちっちゃ
な馬が、つてお母ちゃんと喜んで、寿
司の、いいとこを5人前、取って祝
いました(笑)」

桜花賞は、すべてのレースの中でい
ちばん感動した、という。
「雨で、4コーナーを回ったらいちば



S.Suzuki
エルフィンSを快勝したデアリングタクト。ここで賞金を加算でき
たことによって、桜花賞への直行プランを描けるようになる

**生産馬による初めてのGI勝利。
今も桜花賞の感動は
振り返るたびに蘇る。**

Warrior Street



Y.Takahashi

て、それが嫌われたのか、みんな見
向きもなかったです」と振り返る。
そのデアリングバードの2番仔とし
て、初年度のエピソードを付けて
生まれたのがデアリングタクトだった。
「ピンポコ、ピンポコ跳ねて歩く馬で、
よく朝から、早くごはんよこせー、つ
て啼いてました。繊細で神経質だけど
頭の良い、面白い馬だったな」
パドックではうるさくてもレースで
我慢できる気性は、母譲りだという。
「環境の意味がわかれば、そうでもな
くなるんです。そこは同じです」

それまで15頭を上場(欠場馬は除く)し
て、10頭を売ったが、5頭は主取りだ
った。次々と高額で馬が売れるセレク
トセールだが、日高の生産馬に限れば、
そのイメージは当てはまらない。
「セレクトセールに出すのは、やつぱ
り挑戦という意味もありますよ」
リザーブ価格の800万円が始まっ
た「デアリングバードの2017」の
セリは、残念ながらそのまま声がかか
らず、主取りになった。
そして翌年、長谷川さんは再度、同
馬をセレクトセールに上場した。
「エイドリアンにこの馬を見せてどう
思うか訊いたら、いい馬だと思っ、だ
から挑戦したい、頑張ります、と。そ



S.Suzuki

体質の弱さなどがあったデアリングタクトの母馬デアリング
バード。3歳7月と遅れた初戦で9着に敗れ、1戦で引退



写真提供/パイオニアファーム

デアリングタクトはパイオニアファームで馴致を受け、2018
年のセレクトセールでノルマンディーファームに落札された

桜花賞 2番人気

デビュー3戦目で挑んだクラシック第一戦では、重
馬場をものともせず、豪快な末脚を直線で繰り出す。
40年ぶりの最少キャリアタイ記録で桜の女王に



秋華賞 1番人気

オークスから直行で臨んだ、牝馬三冠最終戦。3コーナー手前から外を進出する強気な競馬で、日本競馬史上初となる無敗の牝馬三冠を達成した

S.Naka

Darwin's Fact

デアリングタクト

2017年4月15日生 牝 青鹿毛
 父エピファネイア
 母デアリングバード(父キングカメハメハ)
 馬主/株ノルマンディーサラブレッドレーシング
 調教師/杉山晴紀(栗東)
 生産牧場/長谷川牧場
 通算成績/8戦5勝

主な勝ち鞍/20秋華賞(G I)
 20オークス(G I)
 20桜花賞(G I)

デアリングタクト 三冠までの成績

年月日	レース名	競馬場	距離(%)	馬場	騎手	着順	人気	タイム
2019.11.16	新馬	京都	芝1600	良	松山弘平	①	2	1:37.7
2020.2.8	エルフィンS(L)	京都	芝1600	良	松山弘平	①	3	1:33.6
4.12	桜花賞(G I)	阪神	芝1600	重	松山弘平	①	2	1:36.1
5.24	オークス(G I)	東京	芝2400	良	松山弘平	①	1	2:24.4
10.18	秋華賞(G I)	京都	芝2000	稍重	松山弘平	①	1	2:00.6

「なかなか夢が見てやっていたけど、実現しないんだって」とその夢が、70歳の誕生日日まで1カ月と少しというところで、ついに叶った。「もっと早く来てたら、寿司の、いいとこ、ばっかり食べて、朝帰りばかりして、牧場はパンクしていたかもしれない。だから、このタイミングで良かったんじゃないかな(笑)」

そう笑った後、しみじみとした口調になって長谷川さんは言った。「いつも夢を見てやっていたけど、突

然でしたね。そろそろだよ、ってお知らせなんかなくて。本当にチャンスはいつ来るかわからない。そのために日々、頑張ることが大事なんです」

デアリングバードに付けたときには250万円だったエピファネイアの種付料は、今年は1000万円にまで上がった。1頭だけの影響でないことは当然だが、しかしそれでも初年度産駒から無敗の牝馬三冠馬が出たインパクトが小さいはずがない。そんな意味でもデアリングタクトは、歴史を変えた名馬なのだと言うことができる。

「こんな小さい牧場がこれだけの馬を出したんだから大騒ぎですよ。でも騒いでくれれば、みんながやればできるという気持ちになります。タクトのおかげもあって、セリでも日高の馬が高く売れるようになってきましたし、いい流れが来てくれた気がします」

特に馬産地で働く若者たちに、長谷川さんは優しい視線を注ぐ。

「若い人たちが、おじさん、って声をかけてくれるんです。みんな本当に一生懸命ですよ。昔みたいにタバコ吸いながらふらふら仕事するような人はいません。本当に頑張っています」

「おじさん」の夢が生んだ歴史的名馬デアリングタクト。その走り、記録はもちろんだが、それよりもっと大事な、目に見えない何かを日本の競馬に残してくれたのかもしれない。

ん後ろの方で、G Iだから5着に入れば生産者賞があるから、せめてそのくらいはと思っていたら……。とつとつとつとこやってくる。感動しました」

生産馬の初めてのG I勝ちに、レースの直後は大騒ぎだったという。

「花は届く、ビールは届く、お客さんは来るで、すごかったです。テレビに電話で出演もしたけど、なにを話したのか覚えてないです(笑)。また寿司を取ろうと思って電話したら、急だったので、シャリが足りません、って(笑)。田舎ですからね」

この桜花賞は、今も記事を読み直したり、ネットでレース映像を見たりして、そのたびに感動が蘇るのだという。「昨日も見ました。だって、何回見ても毎回、1着に来るんだもの(笑)」

オークスは、ライバルの「包囲網」を打ち破って直線、伸びてきた。「普通は馬は接触したら遠慮して行かないのに、それを割ってくるんだからすごい馬だと思いましたよ」

二冠制覇後、夏は北海道へ戻ってノルマンディーファームで放牧された。「帰って来たから見においで、って言ってくれたけど、コロナだから遠慮しました。だからタクトには、競走馬になってからは会ってないです」

そして三冠、最後の秋華賞。

「松山ジョッキーが、外を回って上手に持っていましたよ。たいしたも

いつも夢を見てやってきたけど、突然でしたね、本当にチャンスはいつ来るか分からない。そのために日々、頑張ることが大事なんです。

Y.Takahashi



オークス 1番人気

1~2コーナーでは「包囲網」によりポジションを下げ、直線でも進路が何度も塞がる不利を跳ね除け、63年ぶりの無敗での春の牝馬二冠馬となる

2020 Triple Crown Chronicle